

京都フィロムジカ管弦楽団  
第39回 定期演奏会

BERLIN



FERRUCCIO  
BUŞONI  
(1866-1924)



1921年、旧交を温めるブゾーニとシベリウス

JEAN  
SIBELIUS  
(1865-1957)



HELSINKI

2016年6月26日

# お客様へのお願い

～誰もがより楽しめる音楽会にするために、皆様のご協力をお願いいたします～

- 携帯電話・アラーム付腕時計など音の出る機器をお持ちの場合は、電源を必ずお切りください。
- 演奏中の私語は固くお断りいたします。
- 客席での飲食、喫煙、写真撮影、許可のない録音・録画は固くお断りいたします。
- 補聴器が異常音を発することがございます。ご使用の方はご注意願います。
- 「せきエチケット」にご協力ください。せき、くしゃみがこらえられないときは、ハンカチやタオル等で口と鼻をおおうよう、お願いいたします。なお、演奏中の「のどあめ」の使用は、開封の音がかえって周囲のお客様のご迷惑になりますので、ご遠慮願います。
- 演奏者が音を出していなくても音楽が続いている場合がありますので、物音をお立てにならないよう、ご注意ください。
- 演奏中の客席へのご入場は固くお断りいたします。

## ♪ロビーコンサート♪

午後1時15分より開催

ドヴォジャーク／弦楽四重奏曲 第12番ハ長調 作品96、B.179 『アメリカ』より第1楽章

Ft.御園生、Ob.木津、Kl.関、Fg.石塚、Hr.山影

フルート四重奏曲 ～アニメ・メドレー～

Ft.間嶋、桃川、御園生、高松

シベリウス／フィンランディア

Hr.干場、山影、渡辺、Pos.中村、安田、宮下、Tub.中塚

# 京都フィロムジカ管弦楽団

## 第 39 回定期演奏会

2016年6月26日(日)午後2時開演

八幡市文化センター(大ホール)

∞曲目∞

### 諸井 三郎/こどものための小交響曲 変ロ調 作品 24

MOROI, Saburo (1903-1977) : Sinfonietta inB Op.24 (1943)

- I. Allegro grazioso
- II. Andantino quasi Allegretto
- III. Lento affabile

### ジャン・シベリウス/ヴァイオリン協奏曲 二短調 1904年・初稿

※関西初演

Jean SIBELIUS (1865-1957) : Viulukonsertto d-molli 1. versio(1904)

- I. Allegro moderato
- II. Adagio di molto
- III. Allegro (ma non tanto)

ヴァイオリン独奏: 馬淵 清香

—休憩—

### フェルッチョ・ブゾーニ/交響組曲 作品 25

Ferruccio BUSONI (1866-1924) : Symphonische Suite Op.25 (1883)

- I. Praeludium
- II. Gigue
- III. Gavotte
- IV. Langsames Intermezzo
- V. Alla breve (Allegro fugato)

指揮: 山本 貴嗣

京都芸術センター制作支援事業

## 指揮

### 山本 貴嗣 (やまもと たかし)

大阪大学人間科学部卒。幼少よりピアノとソルフェージュを学ぶ。  
洛星交響楽団でコントラバスを演奏、大阪外国語大学管弦楽団で学生指揮をつとめた。

1995年～2001年 けいはんなフィルハーモニー管弦楽団 音楽監督。この間、同楽団のすべての演奏会とバレエ公演を指揮。2003年より長岡京市民管弦楽団 アドヴァイザリー・コンダクターとして、現在に至るまで数多くの演奏会を指揮してきており、長岡京音楽祭「国民文化祭記念コンサート」にも2012年、2015年の2度にわたって登場した。

バレエ指揮ではプロのダンサーや演出家からの信頼が厚く、近年では「淡路島舞台芸術祭」でチャイコフスキー「白鳥の湖」全幕（コンサートミストレス 馬淵清香氏）、兵庫県芸術文化センターでプロコフィエフ「ロミオとジュリエット」全幕の各公演を成功させた。これまで、ブゾーニの弟子であったクルト・ヴァイルやスウェーデンの作曲家ベルワルトの交響曲、ソ連の国民的作曲家スヴィリードフやフランス6人組の一人ダリウス・ミヨーの管弦楽作品など、演奏機会の少ない作品も積極的に取り上げており、それぞれ好評を博す。



## ヴァイオリン独奏

### 馬淵 清香 (まぶち さやか)

千里生まれ堺育ち大学から江戸で過ごし現在大阪市在住。3歳よりヴァイオリンを始める(知らんけど)。

桐朋学園大学に入学、乙女な頃お風呂なしアパートで3年ほど過ごす。かたや高級マンションに暮らす友達宅で度々お風呂を借り銭湯代をうかす。

イタリア・シエナの音楽祭でヴァイオリンクラスはスルーし、マリオ・ブルネロのチェロクラスに入り浸る。『これは僕のワインだ』と言い張るブルネロ・ディ・モンタルティーノを勧められ、ワインの味を覚える、因みに茨城には『一人娘さやか』私の名前のお酒がある。

趣味はヨシモト、テンダラーの『必殺仕事人』のネタが大好きだ～。  
馬淵家家訓『明日に残っても今日の酒は残すな』遵守するため週に3～4回は呑むようにしている、たまに増える。

小学生より『姫』の愛称で親しまれ、現在も全く違和感なく呼ばれている。

馬淵清香サポータークラブ『清音会セピア』の発展を祈り日々営業活動に明け暮れる。決め台詞は「そろそろセピアはいる？」。四次元三重奏団 Vol. 1 & Vol. 2、ピアニスト多川響子とのDUO「琥珀」など絶賛好評発売中！ 今後も大真面目に正当派路線で弾き散らかしますので応援宜しくお願い致します。聴き逃すと損しますわよ～♪ ホッホッホッ…！



# 曲目解説

遠藤 啓輔(トランペット)

## 諸井 三郎／こどものための小交響曲 変口調 作品 24

フィロムジカでこの曲の演奏を企画したのは、実は2度目である。26回定期(2009年)の前半プログラムとしてこの曲を演奏することがいったん決まったのだ。この時は、2006年に湯浅卓雄指揮の関西フィルハーモニーが演奏したのを聴いたばかりだったので、楽譜も容易に借りられると思っていた。しかし、楽譜管理者が活動を停止し楽譜も行方不明になった、という予想外の事態に見舞われ、曲目変更を余儀なくされたのである。

しかしその後、日本の作曲家を研究しておられるコントラバス奏者の岡崎隆氏(楽譜作成工房「ひなあられ」)から、この曲の自筆総譜のマイクロ・フィルムが明治学院大学の日本近代音楽館にあると御教示頂いた。そこでマイクロ・フィルムを実見したところ、明治生まれのインテリらしい丁寧な筆致で書かれた使い勝手の良さそうな楽譜であったため、すぐにフィルムの複写を申請した。こうして7年越しで演奏の実現にこぎつけた。

さて、諸井三郎の作品は知らなくても、その名前を見たことがある人は意外と多いのではないだろうか? 全音楽譜出版の、特にベートーベンスコア(総譜)の多くで諸井が解説を書いているからだ。僕自身、高校時代に諸井によるベートーベン『エロイカ』の精緻な解説を熟読してソナタ形式の何たるかを学んだクチだ。そうした厳格な研究者としてのイメージ通り、諸井が書いた音楽も厳粛な音楽が堅牢にまとめられた精緻な音楽だ。

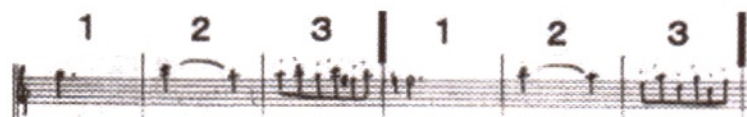
諸井は1903年東京生まれ。ベートーベンに感動して作曲家になり、学生時代から自作を演奏。さらにベルリンに渡って高等音楽学校で学ぶ。ブルックナーやヒンデミットの影響を受けており、そのためか、諸井の作品はいずれも重々しく深刻な音響の中から、救いを求めるような祈りが聴かれるのが魅力である。

帰国後は作曲活動の傍ら公的な役割も任されたようで、1936年にはオリンピックの芸術的側面の調査のため、ベルリン・オリンピック(ナチスのプロパガンダとなったことで知られる)を視察している。1940年に予定されていた(そして、戦争のために結局は開催されなかった)東京オリンピックに備えてのことである。このように諸井の円熟期は第2次世界大戦と重なっており、本日演奏する『こどものための小交響曲』も1943年の作品である。

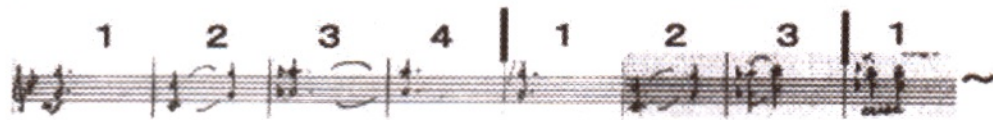
この『こどものための小交響曲』は3楽章構成を取る。諸井は3楽章構成を得意としたようで、交響曲第3番、同4番も3楽章構成である。楽器編成は特殊楽器を一切使わない2管編成。金管の低音担当も、トロンボーンとチューバ各1本ずつで2管編成とする徹底ぶりである。打楽器の扱いも、ティンパニを主体に部分的にシンバルを導入するだけのシンプルなものだ。

**第1楽章**は教科書的なまでに精緻なソナタ形式で書かれている。ソナタは繰り返しを基調とする形式なので、澁刺とした主題が何度も再現する様が聴いていて楽しくなってくる。形式に厳格な諸井の面目躍如だ。また、4分の3拍子で楽章全体が貫かれており、変拍子全盛の20世紀の音楽としてはむしろ新鮮で、古典的印象をさらに強くする。それでいながら、斬新さをも感じさせるのが諸井の凄さだ。初めのうちは、3小節がひとまとまりになった音楽が折り目正しく進行する(譜例1)。しかし、徐々に4小節単位の音楽が挿入されるなど(譜例2)、一筋縄では行かない様相を見せてくる。これが面白い。変拍子が無い平易な音楽でありながらも、変拍子に似た意外性のある音楽が聞こえてくるのだ。こうした絶妙の匙加減は諸井のとてつもない独創性と言って良い。

譜例1 第1楽章第1主題より  
(数字は加筆)



譜例2 第1楽章第2主題より  
(数字は加筆)



**第2楽章**は、3楽章構成の交響曲の傑作・フランクのニ短調交響曲からの影響が色濃い。フランクの第2楽章は、緩徐楽章的でありながらも中心部にせわしなく動く音楽が挿入されていることから、「緩徐楽章とスケルツ

オ楽章を融合した」と評される。諸井の第2楽章も同様に、ゆったりとした楽章の中心部に動的な音楽が挿入されている。その一方で音楽の表情は、憂いを帯びたフランク以上に深い悲しみを湛える。楽章冒頭は胸騒ぎを覚えるような鬼気迫る音楽が展開する。対して中間部は、地を踏みしめて踊るような動的な音楽になり、この部分にだけ使われるシンバルが程好く異彩を放つ。再現部は冒頭にダ・カーボし完璧なシンメトリーを成す。

終楽章である**第3楽章**は、遅いテンポで淡々と歩む。チャイコフスキー『悲愴』やマーラー9番などの先例があるとはいえ、遅いテンポのフィナーレはやはり印象的だ。昔話を静かに恐ろしく語るような丁寧な旋律の背後で、笙の吹奏のよう(指揮者山本先生の談)にも梵鐘の残響のようにも聞こえる音響が鳴っており、まるで伊福部昭を先取りしているようだ。そして、トランペットの弱音の旋律によって静謐なクライマックスを形成する様はマーラーを彷彿とさせる(ナチス時代のこの当時、ドイツではユダヤ人マーラーの作品は冷遇されていた筈なのだが…)。最後はフル・オーケストラのファンファーレで締めくくられるが、力強さの中にもどこか悲痛さを感じさせる。最後の音が単純な変ロ長調の和音で書かれている筈なのに、楽器の割り当ての妙味によってまるで悲鳴のように聞こえてくるのだ。

なお、この曲は『こどものための』と題されている。しかし、重く深刻な楽想に支配されたこの曲は、幼児向けの音楽とは到底考えられない。管見の限り、この題について納得のいく説明がなされた解説文は無さそうだ。しかし、この曲の作曲時期に思いを致すと、この題には実に重い意味があるように思われてくる。『こどものための小交響曲』を作曲した1943年、諸井は交響曲第3番を作曲中だった。この曲は大オーケストラにオルガンまでも導入した大曲で、戦時中のこの時期にはおよそ演奏が実現する見込みは無かったと思われる(実際、初演されたのは戦後の1950年)。このように求道者の如く想念の中だけの音楽に打ち込む一方で、音楽事典によると、交響的幻想曲『黎明を讃ふ』、交響詩『提督戦死』(提督とはこの年戦死した山本五十六のことだろうか)など、いかにも国威発揚に利用されたであろうと推察される曲も同時に書いていたようだ(ほかにも、行進曲『輝かしき日』(1942年)、序曲『勝利の歓呼』(1944年)といった曲もあるらしい)。日本の戦況はどんどん悪化しており、1943年からは学徒出陣が始まった。『こどものための小交響曲』が書かれたのはそのような時期だ。10月6日から作曲を始め、早くも同月21日に完成。そして、この1943年10月21日は、明治神宮外苑で出陣学徒壮行会が催された、まさにその日なのだ。諸井はこの5日後、自ら指揮してこの曲をラジオ放送の電波に乗せた。

ここから、『こども』とは、未来を奪われて死地へと送り込まれる学生たちのことではないか、と思われてくる。想像をたくましくすると、諸井は“こども”までもが戦地に送られる時代に至って、国威発揚のための作曲によって無謀な国策に加担している自分が許せなくなったのではないだろうか。そこで、純粋にひたすら美しい音楽を届けることによって、彼なりの贖罪をしたのではないだろうか。実演の見込みのない大作の作曲を中断し、確実に演奏可能な小編成の簡潔な作品を、“こども”を戦場に送りだすその日までに完成させ、ラジオを通して実際に聴いてもらったのは、彼なりの大人の責任の取り方だったのではないだろうか。

さらに想像を広げる。ロマネスクやゴシックの彫刻をはじめとして、西洋では「死者の魂」を「子供」の姿で表現する伝統があるという。マーラーが曲をつけたことで有名な『子供の魔の角笛』の「子供」も、文字通りの子供というよりは、死者(大人も含めて)の魂を指していると考えた方が良いらしい(金子2011)。大学で美術史科に学んだ諸井も当然それを知っていただろう。そうすると『こどものための小交響曲』も、戦争のために死んだ(そしてこれから死ぬであろう)老若男女すべての魂に捧げられた音楽とも考えられるのではないだろうか。だからこそ、この曲は無条件に美しく、そして悲痛なのだとは僕は信じる。

## シベリウス／ヴァイオリン協奏曲・1904年オリジナル稿(初稿)

北欧フィンランドの大作作曲家シベリウスは、「森と湖」に代表される故郷の美しい自然や、太古から伝わる伝説(フィンランドの叙事詩『カレワラ』は世界的に有名)を愛し、そうしたフィンランド的な美しさや奥深さを備えた独創的な作品を世に送り出した。そんなシベリウスは、本心では作曲家よりもヴァイオリニストになりたかったと言われている。あがり症であることからヴァイオリニストの夢は諦めたものの(そのわりには指揮者と

しては活躍しているのだが…)、シベリウスの作品はいずれも弦楽器の扱いが斬新であり、元ヴァイオリニスト志望であったことがよくうかがえる。ヴァイオリン協奏曲はそうしたシベリウスのヴァイオリンへの思い入れが特に強く表れた作品である。官能的な歌から野卑なダンスまで、ヴァイオリンという楽器の多彩な表現力が存分に生かされているのみならず、ヴィルトーゾ的なピッツィカートやハーモニクスを使った不思議な音色などの特殊効果が、単なる技巧の見せつけではなく、音楽の要素として見事に生きている。

**第1楽章**：弦楽オーケストラがさざ波のように静謐に揺らめく中、湖面を音もなく滑る冥府の白鳥のように独奏ヴァイオリンが優美に悲しく歌う。そのたおやかな流れを断ち切るように、オーケストラが鋭いリズム（**譜例4**）を打ち込む。すると音楽は急激に劇性を強め、静かに轟くような伴奏リズム（**譜例3**）に乗って独奏ヴァイオリンが扇情的に盛り上げる。その後も、どこか懐かしさを感じさせる木管の歌、高みから森を見渡すような広がりをもった独奏ヴァイオリンの旋律など、多様な要素が盛り込まれ、それらがソナタ形式に則って再現される。独奏ヴァイオリンの長大なソロは提示部・再現部のそれぞれに置かれる。提示部のソロは黄昏の空のような妖気に満ちているのに対し、再現部のソロはバッハの受難曲のような厳粛とした悲歌である。楽章の最後は、弦楽オーケストラが**譜例4**のリズムを連呼する上を、独奏ヴァイオリンがフルートを伴って激しく飛翔する。



譜例3 第1・3楽章より

**第2楽章**：神々と人々の応答のような木管の呼び交わりによって、この楽章は目覚める。前楽章で雲まで届くような高音域を舞っていた独奏ヴァイオリンは、この楽章においては、人の肉声のような低い音域で、叙事詩を語るようにゆっくりと温かく歌う。中間部では悲痛な慟哭も聞かれるが、最後は再び温かい語り口調に戻り、果てしない空の彼方に憧れるように独奏ヴァイオリンが上昇していく。

**第3楽章**：冒頭からティンパニのどよめきと**譜例3**の伴奏音型が轟く中、独奏ヴァイオリンが野趣に溢れた豪快なリズムを刻む。巨漢のフィンランド人たちが大酒を煽って陽気に踊っているかのような底抜けのパワーを感じさせる。そして、はやし声を入れるように木管が素朴な歌を添える。やがて、豪快な推進力そのままに、表情にはかげりが差し、悲劇的な暗さを見せる。そして、一瞬挿入されたテンポの遅い音楽が冥府を覗き込むような衝撃を与える。が、しかし、すぐに憑かれたようなスピード感が再燃し、熱狂的な大団円へと突進する。最後は、オーケストラの下降音型と、独奏ヴァイオリンの目の回るような上昇とが交錯するようにして断ち切られる。



譜例4 シベリウス協奏曲(初稿)・第1楽章より



譜例5 ブルックナー7番・第4楽章より



譜例6 ブルックナー5番・第4楽章より

#### 《1904年オリジナル稿(初稿)の受容史》

シベリウスのヴァイオリン協奏曲は1903年に作曲され1904年に初演されたが、その評価が低かったことからシベリウスは大幅に改訂。改訂稿による演奏(1905年)が大成功したことから、この曲は改訂稿(最終稿)の形で演奏・出版されていくことになった。しかし、改訂前の1904年初演稿(「オリジナル稿」あるいは「初稿」と呼ばれる)は果たして駄作なのか？ 僕はむしろ逆で、初稿こそシベリウス独自の魅力にあふれた傑作だと断言する。

長らく幻の作品だったこの初稿が1991年にオスモ・ヴァンスカの指揮で録音された時、僕は高校生だったが、オーケストラ部の中でも大いに話題になった。特に初稿を特徴づける**譜例4**のリズムは衝撃的だった。このリズムがブルックナーからの引用であることは明らかであるが(ライナーノーツには何故か「ベートーベン風のリズム」と書かれていたが…)、僕がブルックナー第7交響曲(**譜例5**)からの引用と主張したのに対し、友人がブルックナー第5交響曲(**譜例6**)の変形と解釈するなどして議論になったのは懐かしい思い出だ。この協奏曲の初稿を

ライブで聴けたのはそれよりずっと遅れて 2005 年、佐藤まどか独奏、広上淳一指揮芸大フィルによる日本初演だった（2月23日、東京芸大奏楽堂）。既に働いていた僕は休暇を取って聴きに行ったが、アンケートに「初稿にこそシベリウス独自の魅力があるとの思いを一層強くした。神出鬼没の音たちが不意に襲ってくる初稿の特徴は、神々や妖精たちが活躍する『カレワラ』の世界を思わせる」と興奮気味に書いたのを思い出す。その後 2014 年には、三浦文彰の独奏による名古屋フィル定期、フィンランドのラハティ市におけるシベリウス・フェスティヴァルでの演奏会、と立て続けに聴く機会に恵まれた。このほか、不覚にも聞き逃した演奏会もあり、初稿の実演機会は着実に増えている。2015 年にスコアが市販されたため、今後さらに演奏機会が増えていくものと信じている。そして本日のこの演奏会は、関西におけるその先鞭であると自負する。

僕が聴いた初稿の演奏会場はいずれも、大変な熱狂に包まれた。初稿が傑作であるということを、現代の聴衆が証明したのだ。1904 年の初稿での初演失敗は、恐らく演奏技術上の不運が重なったためだろう。初稿の初演はシベリウス自身が指揮してフィンランドでおこなわれたが、ソリストはシベリウスが期待していたような名手ではなかった。これに対して改訂稿は、国際的に活躍するソリスト（ブラームスの協奏曲のカデンツァを自ら作曲して演奏していたらしい）を迎え、当代一流の名指揮者でもあったリヒャルト・シュトラウスが指揮するベルリン・フィルで演奏された。初稿と改訂稿はあまりにも違い過ぎる条件下で演奏されたのだ。

### 《初稿の特徴と魅力について》

初稿の特徴を概説すると以下のようになる。

第 1 楽章は、まずオーケストラによるブルックナー風のリズム（**譜例 4**）が印象的だ。このリズムはオーケストラによるクライマックスの主要素材になるばかりでなく、コーダでは弦楽オーケストラがこれでもかとばかりに連呼する。このリズムは、改訂の際に削除または変更されてしまい、改訂稿（最終稿）では全く聴くことができない。一方、独奏ヴァイオリンは初稿にあった 2 つの長大なソロのうち、再現部に置かれたバッハ風の厳粛なソロ（超絶的な技巧が要求される！）は、改訂稿ではカットされている。このように、初稿に盛り込まれた膨大な要素が、改訂によって大幅に削られ簡潔・平易になっている。

第 2 楽章は両稿の間にほとんど違いはない。ただ、レオニダス・カヴァコスが弾く初稿の CD を暗記するほど聴いた愛好者の皆さんは、楽章の最後で独奏ヴァイオリンが第 1 楽章を回想するようにせわしなく動くのを覚えておられることだろう。しかし、このパッセージは、2015 年に出版された楽譜には見られないため、今回は演奏しない。シベリウスはこのパッセージを書いたものの、初演の際に不採用にしたようだ、というのが最新の研究成果らしい（日本シベリウス協会の新田ユリ会長にご教示いただいた）。

第 3 楽章は、初稿ではティンパニをはじめとしてオーケストラの鳴りが厚く、また、木管に印象的な旋律が聴かれる。改訂稿ではこうした重層的な音楽が大幅に整理され、より独奏ヴァイオリンが引き立ち、音楽がよりスピード感を持って流れるようになっている。

こうして比較すると、初稿から最終稿への変更点は以下の 3 点に大別できる。

- ①大幅なカットによってヴァイオリン独奏の技術的難度を低下させる。
- ②「ブルックナーやバッハからの露骨な影響」などと後ろ指さされられそうな部分を変更もしくはカットする。
- ③オーケストラの音響をスリムにすることでソロを引き立たせ、複雑な構成を簡略化することで音楽の流れをスムーズにする。

①②の変更は、売出し中の若手作曲家としては切実な問題だったに違いない。しかし、現代のシベリウス愛好者の立場からすれば不必要な改訂とも言える。①については、演奏者の都合でシベリウスの音楽が短くなるのは実に口惜しい。また②については、所詮は作曲家という狭い同業者の中での問題に過ぎない。聴衆にしてみれば、影響が顕著だろうと何だろうと、美しければそれでいいのである。

僕が特に問題にしたいのは③だ。このような変更は、普通の作曲家であれば「無駄を削ぎ落として簡潔な芸術を作り上げた」と評価されるところだろう。しかし僕は、シベリウスは普通の作曲家ではないと思う。シベリウスの、特に第 3 交響曲以降の傑作群は、音響の中に“ざわめき”が内包された特異な音楽だと思う。まるで関係



無さそうに聞こえる多様な音の要素が積み重なってできた“ざわめき”の中に、まるで森羅万象が封じ込められているように感じられるのだ。シベリウスは故郷フィンランドの、静謐で、無限に広大で、そして透明な自然の中で生活し、作曲した。恐らくこうした環境に身を置いていると、音や空気が静かで清澄であればあるほど、知覚が鋭敏に研ぎ澄まされ、耳から目から皮膚から感じられた自然の微細な表情が、まるで多層的に音たちが重なり合う“ざわめき”のように感じられたことだろう。その感覚が第3交響曲以降の独特な音楽に結実しているように感じられる。ヴァイオリン協奏曲は実に、第2交響曲完成後、第3交響曲完成前の時期の作品だ。第2交響曲までのシベリウスは、ロシア音楽の影響が抜け切らず、普通に格好良く劇的な音楽として演奏することも可能な音楽だ。それがシベリウスは、ヴァイオリン協奏曲の初稿によって、自然の“ざわめき”を内包する独自の境地にいったんは到達した。しかし、時代に先んじすぎた初稿の不評の痛手から(あるいは第2交響曲の成功体験が忘れられなかったのか)、普通に格好良く劇的な音楽への揺り戻しとも言えるべき改訂作業に着手した。もちろんこの改訂は、シベリウスをスターダムに押し上げるために絶大な働きをした。しかし今や、シベリウス独自の魅力は広く認知されている。今こそ、シベリウス独特の音の宝箱とも言えるべきこの初稿の音楽を通して、人智を超えた自然の神々しさと奥深さが、会場の皆様に伝わる時だと確信している。

## ブゾーニ／交響組曲 作品25

「私はブゾーニに会わなければ、森から出てきた単なる放蕩者にすぎなかった」とシベリウスは感謝の弁を述べている。1888年、ともに22歳であったブゾーニとシベリウスはヘルシンキで出会い、交友を結んだ。生年はシベリウスの方が1年早いですが、シベリウスが12月生まれ、ブゾーニが4月生まれだから同い年と言って差し支えない。しかし2人が出会った時点では、ブゾーニの方がはるかにキャリアを積んでいた。

ブゾーニは1866年に北イタリアで生まれる。ドイツ系のピアニストを母にもったこともあって、幼いころからピアノの才能に恵まれ、また、ドイツ語にも堪能であった。わずか7歳の時、イタリアでピアニスト・デビュー。さらに10歳にしてウィーンで作曲家兼ピアニストとしてデビューするという神童ぶりであった。1888年にフィンランドに来たのも、ヘルシンキ音楽院で教鞭をとるためであった。ブゾーニのフィンランド滞在はわずか2年であったが、その時の教え子を妻に迎えたのだから、彼にとって有意義な時間だったに違いない。一方、シベリウスをはじめとするフィンランドの音楽家にとってもブゾーニからの影響は相当なものであっただろう。ブゾーニは音楽に必要なものとして「とにかくまずバッハだ、そしてモーツァルト」と語ったという。シベリウスのヴァイオリン協奏曲の初稿にバッハからの影響が明らかに見て取れるのも、そうしたブゾーニとの交流の賜物のように思われる。

この言葉からもわかるように、ブゾーニはバッハやモーツァルトなどの古典を重視した音楽家であった。幼いころからバッハを研究し(成人後は、バッハ作品の校訂や編曲で名声を博す)、シューマンやメンデルスゾーンに関心を示すなどして、古典の様式を身につけた。当時流行していた標題音楽には背を向け、旋律美と形式美を追求した絶対音楽を重視した。ウィーンでブゾーニの作曲家デビュー演奏会を聴いたハンスリック(ウィーンの音楽界を牛耳っていた評論家)は「ロマン主義の甘い毒はない」と激賞したという。ただ、この言には、ロマン派の旗手ヴァーグナーを目の敵にしていたハンスリックの狭隘な価値観があまりにも出すぎていて、ブゾーニの魅力をかえって矮小化している。ブゾーニは単なる懐古趣味ではなく、伝統を重視する一方で大胆な革新的音楽理論を考案し、絶えず探究する芸術家として独自の道を歩んでいったのである。最も得意とする楽器であるピアノのための作品だけでなく、管弦楽曲からオペラまで、創作の幅は多岐に亘る。

本日演奏する交響組曲は1883年、ブゾーニ16歳の作である。この頃ブゾーニはオーストリアに居を移していた(後にブゾーニはドイツに移り、後半生の大部分をベルリンで過ごす)。ドイツ語圏に移住することでより一層バッハの音楽に耽溺することができたのだろうか、この交響組曲にはバッハの影響が色濃くみられる。そもそも「交響組曲」という曲名が、バッハの傑作群のひとつである「管弦楽曲」を彷彿とさせる。バロック音楽の管弦楽曲は、最初に序曲を演奏し、続いて様々な舞曲を演奏する組曲である。ブゾーニの交響組曲も第1曲が「前

奏曲」で、第2・第3曲に舞曲が配されていることから、管弦楽組曲を範としていることが容易に推察される。その一方で、第1曲が「序曲」ではなく「前奏曲」と題されていることや、終楽章が舞曲ではなく「フガート(フーガを用いた音楽)」になっている点が興味深い。バッハは、即興的で自由な音楽である「前奏曲(プレリュード)」と、無限の繰り返しによって書かれた究極的に厳格な音楽である「フーガ」とを組み合わせた、『前奏曲とフーガ』と題された作品を多数残している。ブゾーニの交響組曲が「前奏曲」に始まり「フガート」に終わるのは、『前奏曲とフーガ』へのオマージュだろうか。

このように基調にバッハが見える作品だが、前述のようにブゾーニは前衛的とさえ言える先進性をも持ち合わせている。その典型は和声だ。この曲には随所に規格外の不思議な和声があり、練習の際にも問題になった。写譜ミスの可能性も考えられるので、“疑惑”の和声に出くわしたときは、常識的な和声になるように楽譜を変更して練習することも試してみた。すると面白いことに、疑問は無くなりスッキリとするのだが、音楽から毒が抜けてしまって実につまらなくなってしまうのだ。どうやらブゾーニの常識外れの和声には、中毒性があるらしい。本日の演奏では、ブゾーニの和声をすべて楽譜通りに演奏するつもりである。天才少年が書いた挑発的な音楽を存分にお楽しみいただきたい。

**第1曲**は「プレルーディウム(プレリュード=前奏曲)」。厳粛な雰囲気を含んだ音楽で、ひんやりとした迷宮をさまよっているような凄みがある。低弦で奏される主題、木管の悲歌、のたうち回るような細かい伴奏音型など、様々な要素が複雑に絡み合う。最後は、暗い雰囲気はそのままに大きく盛り上がる。

**第2曲**は「ガヴォット」。寂しさを湛えた旋律が歌い継がれて始まる。中間部では一転して、ホルンによる野太い牧歌が素朴な力強さをもって奏される。オーボエの副旋律が華を添えるが、まるで太陽のきらめきのようだ。ガヴォットは南フランス由来のゆったりとした舞曲であるが、この中間部は南欧の光にあふれた農村風景が目に浮かぶようだ。その後は、冒頭の寂しげな舞曲が再現され、静かに消えていく。

**第3曲**の「ジグ」はイギリス由来の快活な舞曲で、今でもアイリッシュ・パブでよく演奏される。会場内はもちろん飲食厳禁だが、気持ちだけは黒ビール片手にオイル・サーディンをつついていたりするつもりになっていただければ幸いである。冒頭、扉をノックするような印象的なリズムが打ち込まれるのを合図に舞曲が始まる。このノックのリズムは曲の要所要所で再現して雰囲気を盛り上げる。陽気な舞曲は後半に向かって粗暴なまでの盛り上がりを見せ、最後は冒頭のリズムが拡大した荒々しいファンファーレになる。

**第4曲**は間奏曲で、この曲のみ、バッハ的な厳粛さからも舞曲という形式からも自由になっている。むしろモーツァルト的な優しさと歌心を感じさせ、全曲の白眉というべき珠玉の音楽だ。讃美歌を合唱するように、息の長い旋律が、広々とした豊かな響きをもって歌われる。基本は3拍子だが、かなり頻繁に4拍子が挿入される変拍子の音楽である。しかし、ストラヴィンスキーなどの変拍子が扇情的な興奮をもたらすのとは全く逆に、ブゾーニの変拍子は安らぎをもたらしてくれる。3拍子の流れが、1拍多い4拍子になる瞬間、1拍ゆとりを持って呼吸ができるかのように感じられるからだ。イングリッシュホルンやバスクラリネットといった特殊楽器の温かい音色も効果的に用いられる。中間部は木管がせわしく動くなど胸騒ぎを覚える音楽に変わり、不安げな頂点を迎える。しかしそのクライマックスで冒頭の柔和な讃美歌が降臨し、安らぎの中で閉じられる。

**第5曲**はフーガを用いた堂々たる終曲である。フル・オーケストラで荒々しく印象的に始めると、暗く厳めしい表情のフーガが展開し、やがて1度目の頂点を迎える。この箇所は、遠くから聞こえてくるような静かな音楽が徐々に力を増していき、最後はホルンが英雄的に加わって輝かしいクライマックスを形成する。しかしここはまだ曲の序盤で、その後も総休止を挟んでさらにフーガが展開する。コーダでは、複雑に絡み合っていた諸要素が整理されてたくましい響きになる。暗い曲調のまま情熱的に閉じられる様は、メンデルスゾーン『イタリア』交響曲の末尾を彷彿とさせる。イタリアとドイツの双方に文化的ルーツを持つブゾーニにふさわしい。

※各曲CDのライナーノーツ、Web ページ、音楽事典以外の主要参考文献：金子建志 2011「〈嘆きの歌〉3楽章版・初稿の蘇生」『常葉学園短期大学研究紀要』42／松原千振 2013『ジャン・シベリウス 交響曲でたどる生涯』／マッティ・フットゥネン(菅野浩和訳 2000)『シベリウス 写真でたどる生涯』／久保田慶一(編)2012『バッハ キーワード事典』

# 京都フィロムジカ管弦楽団

## Philomusica Orchester Kyoto

<b>Konzertmeisterin</b> 八木 愉希絵	<b>Bratsche</b> 干場 信孝 赤坂 真央・ 鵜飼 大介・ 久保 将哉・ 樽林 哲也・ 富 研一・ 富安 翔太・ 古田 直道・ 吉川 昌毅・ 岩井 英樹※	<b>Kontrabass</b> 茂原 尚樹 田中 明江 田中 郁太郎 藤井 輝之 寺村 有史・ 丸山 拓史・ 後藤 志帆※	<b>Klarinette</b> 植山 彩花 川辺 英子 山村 真以 中辻 圭郁・ 山田 美保子・ (Bassklarinette)	<b>Posaune</b> 中村 三鈴 宮下 秀行
<b>Violine</b> 小幡 拓也 森 亜紀 八木 愉希絵 安江 絵美子 渡辺 達之輔 加藤 慶太・ 木村 保威・ 佐々木 啓介・ 須田 謙史・ 銭廣 承平・ 谷内 優子・ 中島 幸・ 永田 佳子・ 安原 由克子・ 吉川 正剛・ 渡邊 隆寿・ 内田 佳子※ 香川 玲子※ 福澤 敬子※	<b>Violoncello</b> 奥村 友梨香 小山 裕隆 Cecille de Laurentis 多田 進 西山 峻司 秦野 貴生 松浦 悟子 松浦 由香 高村 誠・ 岡野 正義※	<b>Flöte</b> 高松 香陽子 (Piccoloflöte) 鳥山 梓 間嶋 美波 御園生 香 山口 佳美	<b>Fagott</b> 石塚 有里子 大槻 萌絵 桃川 大毅・	<b>Bassposaune</b> 安田 泉穂・
		<b>Oboe</b> 木津 怜美 大坪 千恵・ 太田 えり※ (Englischhorn)	<b>Horn</b> 加藤 実可子 北山 絵里 中澤 美帆 福山 百音 干場 信孝 山影 つぐみ 渡辺 悠	<b>Tuba</b> 中塚 隆介※
			<b>Pauken</b> 梶井 渉※	<b>Schlagzeug</b> 木村 祐※ 平瀬 光代※
			<b>Trompete</b> 遠藤 啓輔 北山 武志 瀧澤 実帆	・ : 団友 ※ : 客演奏者
				<b>団長</b> 多田 進
				<b>事務</b> 西村 浩

### 弦トレーナー

岩井 英樹

名古屋芸術大学卒業。ヴァイオリンを西岡正臣、ウルリッヒ・コッホ、ジークフリート・ヒュアリンガーの各氏に師事。1997年より大阪フィルハーモニー交響楽団ヴァイオリン奏者。

### 管トレーナー

山崎 雅夫

京都大学卒業。現在、京都大学交響楽団金管トレーナー。トランペットをC、マクベス、A、ハーゼス、M、アンドレの各氏に師事。

## 京都フィロムジカ管弦楽団「友の会」会員様ご芳名

松村 里香様	谷口 佳隆様	西 英子様	和田 之宏様	岡本 洋采様
杉本 幸子様	西坂 壽美子様	河内 尚和様	玉山 茂夫様	藪田 寛様
安藤 美知穂様	鈴木 一俊様	森永 千一様	種坂 勝様	奥井 実様
鎗本 和弘様	辻 良治様	高岡 拓也様	土屋 健太郎様	

2002年4月に発足しました「友の会」は上記会員の皆様方よりご支援いただいております。(5月現在)  
新規会員募集中です。詳しくは裏表紙をご覧ください。

# 京都フィロムジカ管弦楽団からのお知らせ

## ♪第40回定期演奏会♪

2016年12月25日(日) びわ湖ホール(大ホール) 指揮：遠藤 浩史

シューマン/序曲『マンフレッド』

シャブリエ/『田園組曲』

ブラームス(シェーンベルク編曲)/ピアノ四重奏曲第1番・管弦楽編曲版

## ♪新入団員随時募集中♪

～私たちと一緒に演奏しませんか？ まずはお気軽に見学にお越しください。団員一同、お待ちしております。～

私たち京都フィロムジカ管弦楽団は、近畿のみならず全国各地に在住する団員が週に一度京都に集まり、力を合わせて活動しています。定期演奏会だけでなく、アンサンブルなども楽しんでいきます。

「一緒に演奏したい！」という皆様のご参加をお待ちしています。

### ＜募集パート＞

ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバス **(ヴァイオリン・ヴィオラ急募！！)**

オーボエ・クラリネット・トロンボーン・テューバ・打楽器 (※テューバ・打楽器は諸条件について要相談)

〔入団資格〕 練習に出席できること。年齢制限はありません。学生の参加も歓迎します。

〔練習日時〕 毎週日曜日 (午後1時～午後5時) 春と秋に練習合宿 (大津市内。合宿費は10,000円程度)

〔練習場所〕 京都芸術センターなど京都市内各所のほか、大津市など

〔諸費用〕 活動費：3,000円/月 演奏会参加費：20,000～30,000円 (学生・初参加の方には割引あり)

入団・見学に関するお問い合わせ先 E-mail: [recruit@kyotophilo.com](mailto:recruit@kyotophilo.com)

## ♪「友の会」会員随時募集中♪

フィロムジカの活動を応援して下さる方を募集しています

【年会費】 1口 1,000円

【期間】 ご入会いただいた月より1年間

- 【特典】
1. 期間内の定期演奏会に、1口につき1名様を無料ご招待
  2. その他演奏活動のご案内
  3. 定期演奏会プログラムへのご芳名の掲載

お申込み・入会に関するお問合せ Tel&Fax 075-605-0123 (西村) E-mail: [tomo@kyotophilo.com](mailto:tomo@kyotophilo.com)

## 京都フィロムジカ管弦楽団ホームページ

<http://www.kyotophilo.com/>

過去の演奏曲も紹介しております。是非一度ご覧ください。

## お詫びと訂正

本日はご来場いただきまして誠にありがとうございます。  
パンフレットのロビーコンサートの記載に誤りがございましたので  
下記の通り訂正させていただきます。

京都フィロムジカ管弦楽団

- |     |   |
|-----|---|
| (誤) | シベリウス／フィンランディア<br>Hr.干場、山影、渡辺、Pos 中村、安田、宮下、Tub 中塚             |
| ↓   |   |
| (正) | シベリウス／フィンランディア<br>Hr. <u>中澤</u> 、干場、山影、渡辺、Pos.中村、安田、宮下、Tub.中塚 |